学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	生田　慶穂 【比較社会文化学専攻　平成23年度生】	要　　旨
文　題　目	連歌生成論　―式目のある文芸ということ―	本論文は、日本中世の代表的文学ジャンルの一つである連歌について、そのルールとなる「式目」の面から新たな考察を試みたものである。 連歌百韻は、式目の規定に則って進められていくものであるが、式目に関する研究は従来停滞していた。それは、式目自体の資料を整理し、その内容を詳しく理解することの難しさ、また式目の史的変遷と改訂の事情などに通暁していなければ作品に対して誤った適用をしてしまう危険があることなどによる。 申請者はまず式目の規定が何を意味し、作品理解のためにどのような手続きを経なくてはならないかという前提的議論から出発し（第二章第一節）、式目に注目することでどのような研究が可能であるかを六編の考証により明らかにした。 例えば、百韻の中に「花」（桜）がどれだけ許容されるかとについての通時的な揺れの問題を連歌師心敬の『私用抄』の分析を通して検討し、大きな連歌表現の流れと結びつけ（第二節）、あるいは類同の素材をどれだけ続けて詠み込めるかという規定に基づき、南北朝期と室町中期とではどのように異なっていたかを調査して、百韻参加者の意識の変化を読み取り（第三章第二節）、また実際に連歌を付けていく過程で式目違反が見つかるとどう直すのかという本文改編の問題を、貴重な原懐紙である看聞日記紙背連歌によって具体的・実証的に明らかにする（第四章第一節）など、従来の連歌表現史を新たな角度から更新していく論述となっている。 全体に、式目自体の変化から連歌史へ切り込むこと、式目に注目することで異なった作風のグループの特質（個性）を浮き上がらせること、伝来する本文の揺れと式目とを結びつけることなど、式目に特化した視点によって、それぞれ新たな成果を生み出しており、方法的な有効性を実証することに成功していると考えられる。
審 査 委 員	（主査）　教授　　浅田　徹	
	教授　　神田　由築	
	講師　　藤川　玲満	
	准教授　松岡　智之	
	助教　　大薮　海	